

文字指導における小学校外国語活動と 中学校英語教育の連携について —CEFR をもとにした考え方による—

高橋 美由紀

(愛知教育大学)

柳 善和

(名古屋学院大学)

キーワード：文字指導、小中連携、評価基準

1. 研究の目的

この論文の目的は、高橋・柳(2007)、高橋・柳(2008)に基づいて、小学校英語教育における文字指導について、小中連携の立場からより広い視点で位置づけを考えることである。高橋・柳(2008)では、CEFR⁽¹⁾の考え方に基づいて、小学校英語教育における文字指導の流れの一例を示した。本研究では、小学校外国語活動から中学校英語教育に至る「文字」「読み」「書き」の学習の流れを、CEFRの能力記述文に基づいて組み立て、実際の小学校6年生に対するアンケートの結果と比較して検討する。

2. 学習指導要領による文字指導の位置づけ

文部科学省(2008a:108)では文字指導の扱いについて、「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取り扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」として

いる。さらに文部科学省 (2008b:19)では、文字指導について、①大文字と小文字の区別、②音声面の補助としての位置づけ、③ただし、発音と綴り字の関係は扱わない、という3点を指摘している。

この考え方に関して以下の問題がある。第1に、文部科学省 (2008a: 24)では、ローマ字の指導について、「(ア) 第3学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、また、ローマ字で書くこと。」としており、この時点でアルファベット文字は一部が導入済みであり、このことと外国語活動の関連が言及されていないことである。第2に、中学校との関連で、「文字の指導」から「読み・書き」に至る道筋が文部科学省 (2008a)では明確になっていないことである。

3. CEFR の考え方による文字指導の流れ

(1)CEFR の A1 段階における「読み」「書き」の能力記述文の構造

CEFR では、言語能力を全てにわたって包括的に記述することを目指し、その評価基準を A1、A2、B1、B2、C1、C2 の6段階に分けており、いちばん初歩的な段階が A1 である。それぞれの評価基準は、技能別、場面別などの項目で能力記述文によって示されている。ここでは A1 の部分の「読み」「書き」の技能について使われている記述文を基にして、文字の習得から「読み」「書き」の初歩までの段階を検討する。

まず、CEFR では A1 の「読み」「書き」について自己評価表の中で、それぞれ「例えば、掲示やポスター、カタログの中のよく知っている名前、単語、単純な文を理解できる。」「新年の挨拶など短い簡単な葉書を書くことができる。例えばホテルの宿帳に名前、国籍や住所といった個人のデータを書き込むことができる。」としている (吉島他 2004 : 28)。これだけでは、実際にどの程度の技能を想定しているのかが明確になりにくい、他にもそれぞれの能力について、いくつかの状況に分けてさらに記述され

ている。

「読み」については、①「非常に短い簡単なテキストを、身近な名前、単語や基本的な表現を1つずつ取り上げて、必要であれば読み直したりしながら、一文一節ずつ理解することができる。」②「葉書の短い簡単なメッセージは理解することができる。」③「日常のよくある状況下で、簡単な掲示の中から身近な名前や語、基本的な表現がわかる。」④簡単な情報の内容や、簡潔な描写の概要を把握することができる。特に視覚的な補助があればさらに容易に概要の把握ができる。」⑤「(例えば X から Y に行くために) 短い、簡潔に書かれた方向指示を理解できる。」(吉島他 2004: 73) といった記述文がある⁽²⁾。

①～⑤の記述文を見ると、例えば③や⑤にあるように、身近な名前や単語を拾い出すことや、方向指示などを表す文字列を認識したりすることから、①にあるような一文一節ずつを理解できるようになるまでの流れがあることがわかる。

一方、「書き」については、⑥「簡単な表現や文を単独に書くことができる。」⑦「自分自身の想像上の人々について、どこに住んでいるか、何をする人なのかについて、簡単な句や文を書くことができる。」(吉島他 2004: 65) ⑧「個人的な細かい情報の要求を書いたり、文書で伝えることができる。」⑨「短い簡単な葉書を書くことができる。」⑩「ホテルの予約用紙などに、数、日付、自分の名前、国籍、住所、年、生年月日、入国日などを書くことができる。」(吉島他 2004: 86) ⑪「標準的な様式で印刷された単語、または短いテキストを書き写すことができる。」(吉島他 2004: 102) ⑫「例えば、簡単な記号や指示、日常的なものの名前、店の名前や普段使う定型表現など、馴染みのある単語や短い言い回しを書き写すことができる。当人の住所、国籍やその他の個人的な情報を正確に書くことができる。」といった記述文が拾い出せる。

⑥から⑫の記述文にも、「読み」の場合と同様に、学習の流れがある。例えば⑫では身近な単語を書き写す能力、⑪ではさらに単語や短いテキストを書き写す能力を述べ、それが⑩の名前を含む自分の情報を書く能力、さらに⑨で短い簡単な葉書（年賀状などを想定）を書く能力を経て、⑥や⑦の簡単な表現や文が書ける能力に至っている。

CEFR の A1 レベルは、日本では、英語学習を始めてから中学校の 1 年生あるいは 2 年生前半くらいまでと考えられる。この段階の学習の進み方の一連の流れが、能力記述文をこのように読み取ることで認識できる。日本では小学校と中学校の英語教育では学習指導要領が分かれており、かつ評価規準の点からも小学校と中学校が接続していない部分がある⁽³⁾。その点からも CEFR を利用することによって、日本の小学校高学年から中学校 1 年生までの指導の流れが明確になるものと期待される。

(2)CEFR をもとにした小学校から中学校に至る「文字」「読み」「書き」 学習の流れ

(1)で考察した CEFR の能力記述文の流れをまとめたものが次の図 1 である。

このうち、アルファベットについては国語科のローマ字学習で一部が導入済みであるので、①の段階はすでにその時点で通過していることになる。また、これらの流れにおいて、英語学習に対する意欲、意識も背景に存在する。日常生活において周囲の環境の中で文字や英語表現に気づくかどうかは、その後の英語学習への意欲に結びつく問題である。吉島他 (2004) では、CEFR を基にしたカリキュラム開発の実例の 1 つとして、小学校段階での外国語学習への意識を向上させることを述べている (吉島他 2004: 185)。

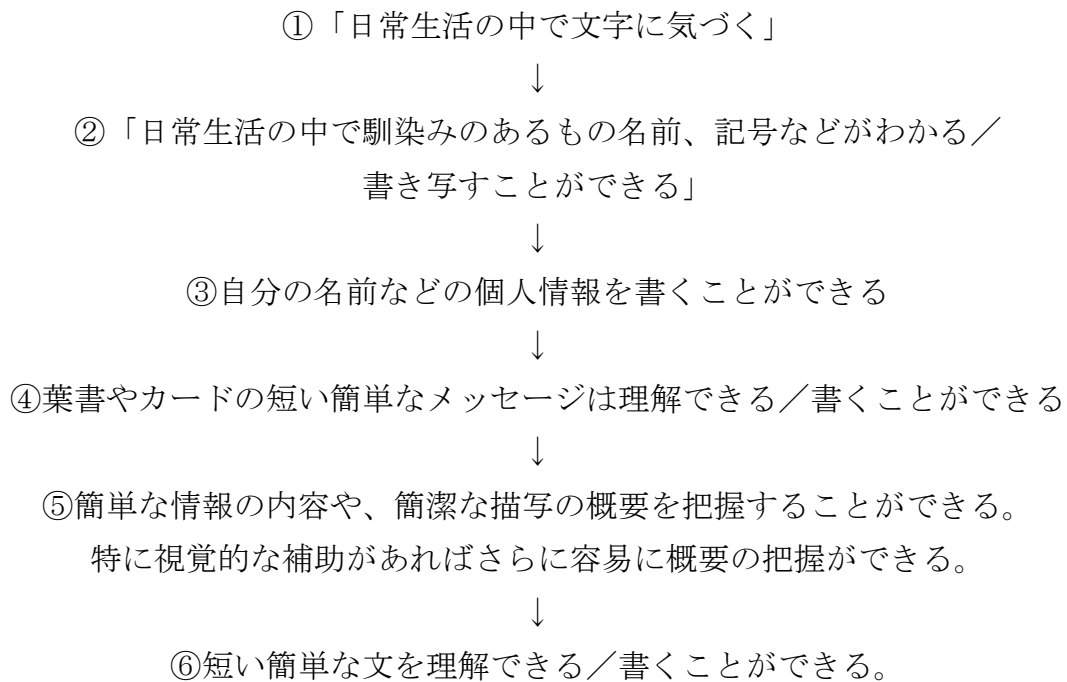


図 1: CEFR の能力記述文を基にした「文字」「読み」「書き」の学習の流れ

また、図 1 では「読み」「書き」を便宜上混在させてあるが、内容としては、自分の名前を含む個人情報や馴染みのある単語の読み書きから、葉書やカードのメッセージの読み書き、さらに簡単な文の読み書きへと学習が進む様子が表されている。このうち④や⑤までは現在の小学校外国語活動でも実践されている。例えば④では年賀状などの作成、⑤では絵本の読み聞かせや、工作・料理の説明などを読んで実際に作るといった活動である。そして、⑥の部分からは中学校の英語学習に任されるところが多い。

4. 児童の英語の文字に対する意識の調査

本前章では CEFR の能力記述文を基にした「文字」「読み」「書き」学習の流れを考察したが、これをもとにして、本章では児童が英語の文字学習に対して、どのような関心・意欲を持っているかについてのアンケート調査を扱う。

4.1 調査の概要

児童の英語の文字に対する意識調査は次のように実施した。

調査対象：A 市立 S 小学校 6 年生 99 名（3 学級）

調査時期：2010 年 6 月中旬

調査方法：各学級で、学級担任によって一斉に実施し、終了後そのまま回収した。

調査内容：以下の項目について調査した。①は「有る・無し」の 2 件法、②以降の選択式の回答は 4 件法によった。また④～⑨についてそれぞれ項目の 2 行目は記述式で回答を求めた。

- ① 学校外での英語学習について
- ② ABC の歌は知っていますか？
- ③ 英語の文字（ABC... XYZ）は知っていますか？
- ④ お店の看板やスーパー等で、英語の文字をみかけたことはありますか？ どんな英語を見かけますか？ 英語でも日本語でも良いので書いて下さい。
- ⑤ 自分の名前を英語で書いてみたいですか？ それはなぜですか？
- ⑥ 英語の文字を読みたいですか？ どんな時に文字を読みたいですか？
- ⑦ 英語の文字を書きたいですか？ どんな時に文字を書きたいですか？
- ⑧ これまでに英語の文字を読んだことがありますか？ どんな時に、どんな文字を読みましたか？
- ⑨ これまでに英語の文字を書いたことがありますか？ どんな時に、どんな文字を書きましたか？

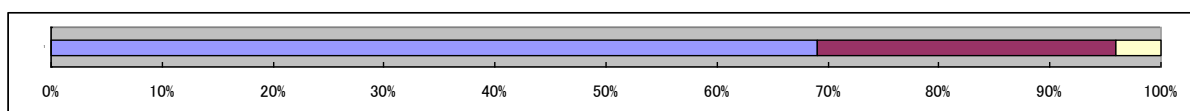
①～⑨の調査内容は次のような理由で作成した。まず①は調査対象の児童の学校外英語学習の実態を把握するものである。②③は文字学習の実態を把握するために作成した。④は文字への気づきを扱っている。⑤については「個人的情報を書くこと」のうち最も初歩的な自分の名前を書くことに対する児童の意欲を扱った。⑥⑦については児童の英語学習への意識を扱った。これらの項目を踏まえて⑧⑨では、児童の実際の「読み」「書き」の学習の様子を訊いたものである。

4.2 調査結果

最初に選択式の部分の結果を示し、記述式の回答については紙面の制限により、考察の部分で示すことにする。

① 学校外での英語学習について

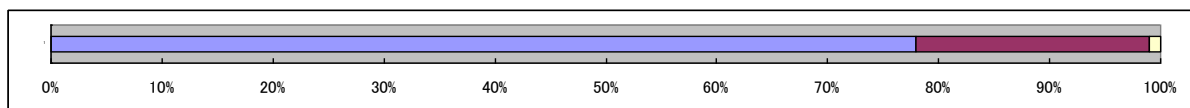
4 有り 69% 3 無し 27% 2 無回答 4%



② ABC の歌は知っていますか？

4 よく知っている 78% 3 知っている 21% 2 知らない 1%

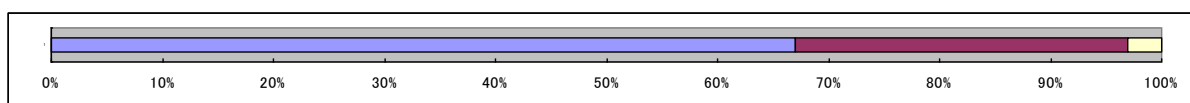
1 全く知らない 0%



③ 英語の文字 (ABC... XYZ) は知っていますか？

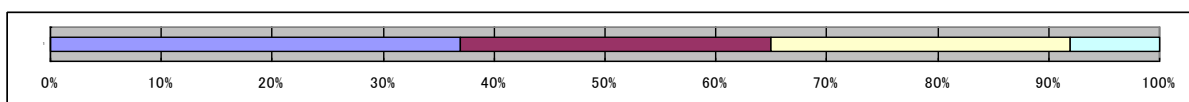
4 よく知っている 67% 3 知っている 30% 2 知らない 3%

1 全く知らない 0%



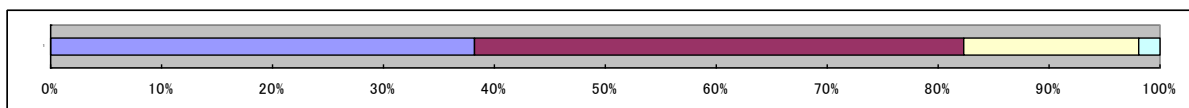
④ お店の看板やスーパー等で、英語の文字をみかけたことはありますか？

4 よく見かける 37% 3 見かける 28% 2 見かけない 27%
1 全く見かけない 8%



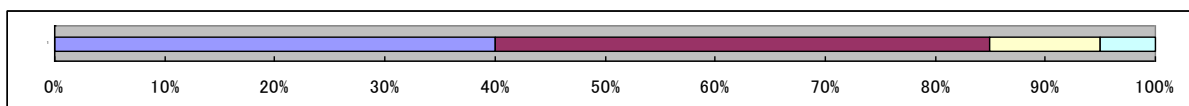
⑤ 自分の名前を英語で書いてみたいですか？

4 とても書きたい 38% 3 書きたい 44% 2 書きたくない 16%
1 全く書きたくない 2%



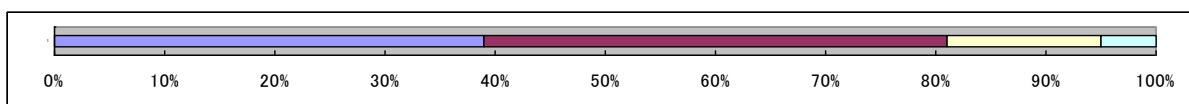
⑥ 英語の文字を読みたいですか？

4 とても読みたい 40% 3 読みたい 45% 2 読みたくない 10%
1 全く読みたくない 5%



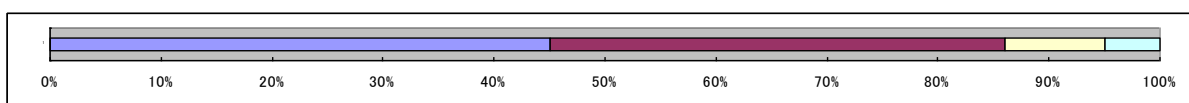
⑦ 英語の文字を書きたいですか？

4 とても書きたい 39% 3 書きたい 42% 2 書きたくない 14%
1 全く書きたくない 5%



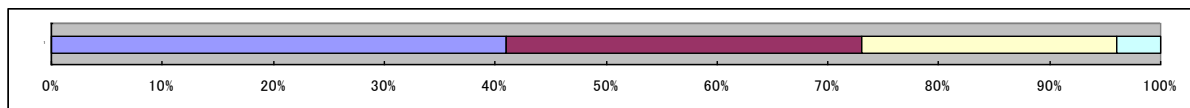
⑧ これまでに英語の文字を読んだことがありますか？

4 よくある 45% 3 ある 41% 2 あまりない 9% 1 ない 5%



⑨ これまでに英語の文字を書いたことがありますか？

4 よくある 41% 3 ある 32% 2 あまりない 23% 1 ない 4%



5. 児童に対するアンケートの結果に対する考察

5.1 学校外での英語学習について（項目①）

S 小学校では 6 年生の児童で 69%が学校外の英語学習を経験している。この調査を行った S 小学校では 2007 年から、1 年生から 6 年生まで全校で学級担任による英語活動（外国語活動）の実践に取り組んでおり、そのための教員研修や研究発表会なども積極的に開催してきた。保護者の関心も高く、子どもたちに英語を学校外でも習わせることにつながっているものと考えられる。

5.2 ABC の歌、英語の文字の認知度、英語の文字への気づき（項目②～④）

ABC の歌は 99%、英語の文字では 97%の児童が「よく知っている」「知っている」と回答している。

英語の文字への気づきを見るための項目④では、「よく見かける」「見かける」が 65%となっている。これに対して、児童が挙げた記述式の回答例として、店の名前(サークル K、マクドナルド等)、メーカーの名前 (アップル、PUMA、Addidas 等)、地名の看板 (OKAZAKI、Nagoya 等) がある。同じものを見ていても意識に上らない児童も存在しているが、一方ではこのように多彩な文字への関心が見られる。

5.3 自分の名前を書きたいか？（項目⑤）

この項目は自らが発信してコミュニケーションしたいという意欲を見る

ために設定したものである。「とても書きたい」「書きたい」の合計は 82%であった。

回答の理由を記述式で尋ねると、「書きたい」という反応をした児童からは、「かっこいいから (12名)」「外国の人に名前を知ってほしいから(5名)」という英語学習への意欲を示す回答や、「名前はひらがな、かたなか、漢字などいろいろ書き方があるから」という言語への気づきを示すものがあった⁽⁴⁾。

一方、書きたくない理由としては、「日本語でこまらないから」「漢字の方がじっくりくるから」「漢字でいいから」といった英語に対する無関心を思わせる回答と、「あまり書けないから」「英語はむずかしいし、今おぼえてもなんのやくにもたたないから」といった英語学習に対する苦手意識を思わせる回答があった。

5.4 英語の「読み」「書き」に対する関心 (項目⑥⑦)

「英語を読みたいですか」については、「とても読みたい」「読みたい」で 85%に達する。「どんな時に読みたいか？」の回答としては「おみせの名前とか人の名前 (3名)」「T シャツに書いてある文字 (3名)」等、項目②～④で見られた身の回りに気づく文字を読みたいという回答がある。また「絵本、本 (6名)」のように、英語で何かを読みたいという願望も見られる。

「英語を書きたいですか」については「とても書きたい」「書きたい」の回答の合計が 81%に達する。「どんな時に書きたいか？」の回答としては、「外国の人に「〇〇？」と聞かれても書いて答えれるから」といったコミュニケーションの代替手段として必要というもの、「外国人に文を書くとき 外国の人へ出す手紙やお知らせ」「クリスマスカードや年賀状を書く時」の手紙等、また「ユーアタイムのプリントに自分の名前を英語

で書きたい」など、とにかく学習したことを使ってみたい、という回答もあった。

5.5 英語の「読み」「書き」の経験（項目⑧⑨）

「これまでに英語の文字を読んだことがありますか？」に対して「よくある」「ある」で86%になる。

「どんな時にどんな文字を読んだか？」については、まず「ならっている英語の時間にいろいろ（11名）」「ならいごとで「book」など」「ECCの時にものがたりをよんだ（5名）」など学習時間中に読んだという回答がある。その他に日常生活の中で、「駅で「普通」「ひかり」などを読んだ」「お店のかんばんにセールの文字などをよんだ」「自分のふでばこ「PUMA）」という回答もあった。

「これまでに英語の文字を書いたことがありますか？」に対し、「よくある」「ある」は73%になる。

「どんな時にどんな文字を書いたか？」については、まず「じゅくの英語で（13名）」「ECCの時に文を書いた（4名）」など学校外の英語学習で経験している児童が目立つ。また、学校の授業でも「英語の振り返りカードに名前を書く時」のように書いた経験を回答した例もあった。他には、「手紙を書く時最初に Hello と書いた」など手紙を書く際に書いたという回答もあった。

6. 文字指導における小学校外国語活動と中学校英語教育の連携に対する示唆

ここでは、第4章と第5章で示した、小学校6年生に対する文字の読み書きについての調査の結果を基に、児童の英語学習の現状をまとめ、CEFRを利用した学習過程把握の意義を論じる。

6.1 文字学習に対する意欲

まず第 1 に、被験者の児童は英語の文字に対する興味・関心は十分にあり、身の回りの様々な英語の文字に対してもすでに多くの知識や経験を持っていることである。これは身の回りの英語を拾い出させた調査項目④の結果からもわかる。第 2 に、英語の文字の「読み」「書き」に対する意欲についても、調査項目⑤⑥⑦の結果から児童はかなり高い意欲を持っていることがわかる。S 小学校では前述のように、英語活動の実践には積極的に取り組んでおり、このような実践が他の小学校にも広がれば、文字指導に関して児童に十分な興味・関心を与えることは可能であると推測される。

6.2 「読み」「書き」の学習の経験と CEFR 使用の意義

被験者の児童の「読み」「書き」学習は、「よくある」「ある」の合計でそれぞれ 86%、73%に達する。これらの数字からは、児童が文字学習から始まって、英語学習に対する意欲を持続しながら「読み」「書き」の学習まで一貫した流れを維持していることがわかる。

小学校外国語活動から中学校英語教育への連携を考えると、学習指導要領では、小学校での文字指導の扱いが、中学校での「読み」「書き」に繋がっておらず、小学校と中学校の連携が図れていない印象を受ける。しかし、CEFR では A1 レベルとして、ちょうど小学校高学年から中学校 1 年生の内容を扱っており、記述文を分析すると、一貫した流れを認識することができる。この流れの中で、本論文の被験者の児童の英語学習の実態を考えると、CEFR で記述してある A1 レベルの能力の流れとおおよそ一致していることになる。つまり、小学校および中学校の学習指導要領では見えにくい小学校と中学校の連携を見通すことが可能になるのである。この点で CEFR を参照しながら小学校外国語活動及び中学校英語教育における「文字」「読み」「書き」の学習の流れを把握することに意義がある

と考えられる。

注

- (1) CEFR の詳細については、Council of Europe (2002) [吉島他(2004)] を参照のこと。
- (2) 能力記述文の冒頭の番号は、筆者らが任意につけたもので、何らかの順番を表すものではない。
- (3) 小学校外国語活動と中学校英語教育の評価規準の違いについては http://www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_icsFiles/afieldfile/2010/05/13/1292899_1.pdf を参照のこと。
- (4) アンケートの回答の引用については被験者の回答をそのまま使用している。

引用文献

文部科学省 (2008a) 『小学校学習指導要領』 東京書籍。

文部科学省 (2008b) 『小学校学習指導要領解説外国語編』 東洋館出版社。

文部科学省 (2008c) 『中学校学習指導要領』 東山書房。

高橋美由紀・柳善和 (2007) 「中学校英語へ繋ぐための小学校英語活動の評価—ヨーロッパ共通参照枠をもとにした評価基準の構築—」『小学校英語教育学会紀要』 第 8 号 103-110。

高橋美由紀・柳善和 (2008) 「体験的な言語学習による文字指導における統一評価基準の研究：ヨーロッパ共通参照枠 (CEFR) をもとにして」『小学校英語教育学会紀要』 第 9 号 103-110。

Council of Europe (2002) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching Assessment (3rd)*. Cambridge University Press. [吉島茂・大橋理枝他 (訳・編) (2004) 『外国語教育Ⅱ外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社]。